

「世界を正しく見る」ということ — 『論理哲学論考』の世界観—

山 西 均*

[要旨] 本稿では、ウィトゲンシュタイン (Ludwig Wittgenstein) が『論理哲学論考』(“Tractatus Logico-Philosophicus”) の最後に「世界を正しくみる」と述べる際、彼が世界をどのように理解していたかを明らかにする。結論を導くに当たっては、長年に渡り論争が続き、今なお決着が着いていない「形而上学的解釈」と「断固たる読み」の2つの解釈と本稿の主張の関係を明確にする。結論は次のようなものである。世界を構成する諸事実は、自然科学の命題(有意味な命題)で語りうる対象であるが、価値を持たない。またそれ自体が事実である自然科学の命題にも価値はなく、それらを語ることにより価値が生ずることはない。価値の対象はすべて世界の外にある。この結論の特徴は、『論考』を理解するためには、言語哲学(意味の理論)の観点だけでは十分ではなく、世界、ひいては命題に対する価値の観点を持つことが求められる、とする点である。

はじめに

『論理哲学論考』(以下『論考』)は最後に「私の諸命題」、つまり『論考』に書かれた諸命題を「葬りさること」を読者に求める(引用はいずれも TLP, 6.54¹⁾)。その上で結論として、読者は「世界を正しくみる」(TLP, 6.54)のだと言う。『論考』の最後に現れるこの主張は、ウィトゲンシュタインが「読者は『論考』を最後まで読むことにより、世界を正しく理解するはずである」という考えを持っていたことを示している。本稿の目的は、この「世界を正しく見る」という一文が何を意味するのか、ウィトゲンシュタインがこのように述べる際に想定していた正しく見た世界とは何か、つまり『論考』執筆時の彼の世界観はどのようなものかを明らかにすることである。

本稿の流れは次の通りである。まず第1節で『論考』本文を三つの括り(「1」～「6.3751」、「6.4」～「6.522」、「6.53」～「7」)に分ける。第2節から第4節でそれぞれの括りから、ウィトゲンシュタインの世界に関する理解を取り出し、第5節で結論を述べる。結論は次のようなものである。世界を構成する諸事実は、自然科学の命題(有意味な命題)で語りうる対象であるが、価値を持たない。またそれ自体が事実である自然科学の命題にも価値はなく、それらを語ることにより価値が生ずることはない。価値の対象はすべて世界の外にある。この結論の特徴は、『論考』を理解するためには、言語哲学(意味の理論)の観点だけでは十分ではなく、世界、ひいては命題に対する価値の観点を持つことが求められる、とする点である。

* 准教授／哲学・金融・人的資源管理

なお今日『論考』の結論について論述にするにあたって、2000年頃から今なお論争が続く二つの見解、つまりハッカー (P. M. Hacker) を中心とするいわゆる「形而上学的解釈 (metaphysical reading)」(Maddy, 2014: 37、以下『論考』以外はすべて引用者訳) とコナント、ダイヤモンド (James Conant, Cora Diamond) を中心とするいわゆる「断固たる読み (resolute reading)」(Conant and Diamond, 2004: 46) との差異・整合性について述べて済ませることはできないであろう。この点については、第4節、第5節で彼(女)らの見解と比較し、本稿の見解との違い・共通性をあきらかにする。

1 『論考』の三つの主張

「『論考』の主要テーマは非常に簡単に要約できるように見える」(Ayer, 1985: 17)、あるいは「細部において『論考』は哲学的作品の中でも最も難解なものであるが、その概要はよく知られている」(Kripke, 1982: 71) と言われる。実際『論考』の要約や概要を作成するのはさほど困難な作業ではない。ただその中身については、クリプキの言う「細部」だけではなく、そもそも『論考』の主張が読者に伝える結論は何なのか、という点についても論争が続けられている。『論考』の結論についての議論は、主に命題と事実の関係、真理関数についての主張が行われる「1」から「6.3751」と、それ以降(「6.4」以降)に分けて行われることが通例である²⁾。また「6.4」以降についての議論は、倫理・価値等についての主張が行われる「6.4」から「6.522」と、語りうること語りえぬことについての主張が行われる「6.53」から「7」に分けて行われることが多い。本稿もこれを踏襲し、これら三つの箇所それぞれを次のように〈第一の主張〉等と呼び、順に論ずる。

- ① 第一の主張：「1」から「6.3751」
- ② 第二の主張：「6.4」から「6.522」
- ③ 第三の主張：「6.53」から「7」

「はじめに」で述べたように、本稿の目的はウイトゲンシュタインが最後(正確には最後から二文目)で「世界を正しく見る」(TLP, 6.54)と述べる際、彼が言う〈正しく見た世界〉とは何か、読者が理解すべき〈正しい世界〉とは何かを確認することである。したがって以下順に彼の三つ主張を論ずる際は、この目的に関連する観点から行う。

2 第一の主張：「世界」の中の「命題」

ウイトゲンシュタインの「1」から「6.3751」の主な主張は、さらに次の三つに分けることができる。彼は、「1」「2」では主に「世界」「事実」「事態」について、「3」「4」では主に「論理像」「思考」「命題」について、「5」「6」では主に「真理関数」について述べている。以下では「世界」と「命題」の関係を確認するために、この内「1」から「4」の内容について確認する。

「1」「2」の主張は次のようなものである。まず冒頭の主文³⁾「1」で「世界」が定義されている。「世界は成立していることがらの総体」(TLP, 1)、すなわちそれは「事実の総体であり、ものの総体ではない」(TLP, 1.1)。「事実」とは「諸事態の成立」(TLP, 2)であり、この「事態」とは「諸対象(もの)の結合である」(TLP, 2.01)。「世界」は「事実」によって、「事実」は「事態」によって、「事態」はこれ以上分析することのできない「対象」によって構成されている。「対象」は「空間、時間、そして色」(TLP, 2.0251) という形式を持つ。

おそらくすべての論者が合意するように、『論考』は世界や事実の物理的な構造の解明を目的とするものではない。「1」で定義された「世界」も、あくまで「思考」あるいは「命題」と射影関係にあるものとして捉えられている。『論考』「3」「4」の主張の主な目的は、この関係をあきらかにすることである。それは次の二つの主文に要約されている。「事実の論理像が思考である」(TLP, 3)。「思考とは有意義な命題である」(TLP, 4)。これら二つの主文は、〈A (事実の論理像) はB (思考) である。B (思考) はC (有意義な命題) である〉というつながりで成り立っている。これが同値関係を表し推移律 (AはCである) と対称律 (CはAである) が成り立つと理解すると、次の簡略なテーゼを導くことができる。

テーゼ1:

有意義な命題は事実の論理像である。

テーゼ1では主文「3」「4」両方に現れた「思考」を消去しているが、それはテーゼ1の「有意義な命題」、「事実の論理像」のいずれとも置き換え可能である。なお『論考』で「命題」という語は、特に断りがなくても「有意義」であることを前提として使われているので、以下「命題」と表記する場合も「有意義な命題」を意味するものとする。

命題は命題記号と密接に結びついている。ウィトゲンシュタインは、「われわれが思考を表現するのに用いる記号を、私は命題記号と呼」(TLP, 3.12) ぶとする。ここに言う「思考」は、上記引用 (TLP, 4) からわかるように「命題」のことである。その上で彼は「命題とは、世界と射影関係にある命題記号である」(TLP, 3.12) とする。ここに言う「命題記号」とは、「4.442」に例示されているいわゆる真理表を意味する。

たとえば次は命題記号である。

p	q	
真	真	真
偽	真	真
真	偽	
偽	偽	真

](TLP, 4.442)

ウィトゲンシュタインの考えでは、「われわれは、可能な状況を射影するものとして、命題という知覚可能な記号（音、音記号、文字記号、等々）を用いる」（TLP, 3.11）のであり、こうして用いられた「命題記号は一つの事実である」（TLP, 3.14）。この考えには一つの大きな特徴があり、それは彼が命題をいわゆる抽象的対象（特定の時間・空間的な位置づけを持たない対象）としてとらえられていないということである。ウィトゲンシュタインは後年言語を崇高化する傾向、つまり「命題記号と事実の間に、純粋な中間的存在を想定する傾向、あるいはまた、命題記号そのものを純化、崇高化しようとする傾向」（PI, § 94、原文イタリックは傍点で表記）を批判する。この『哲学探究』での批判は、「『論考』において最も顕著な傾向」（McGinn, 1984: 41）を批判したものであるとされるが、先の「3.11」と「3.14」を見る限り、彼は『論考』では前者－命題と記号の間に純粋な中間的存在（一種の抽象的対象）を想定－の立場ではなく、命題記号を一つの事実と認めた上で後者－命題記号そのものを純化・崇高化－の立場で考えていたのだと理解することができる。以上の命題と命題記号に関する見解は次のテーゼに整理することができる。

テーゼ2：

命題は命題記号として一つの事実である。

このテーゼには、補足が必要であろう。この考えについて、ラッセル（Bertrand Russell）からウィトゲンシュタインに、手紙で次の趣旨の質問が呈されている。「一つの思考 [命題]⁴⁾ は一つの事実である (a Gedanke is a Tatsache)」(NB 130) として、何がその構成物で、それらの構成物は射影された事実の構成物とどのような関係にあるのか。この問いに対するウィトゲンシュタインの返答は「私は何が思考の構成物であるのかは知らないが、それが言語の語 (the words) に対応するような構成物を持っていないなければならないということを知っている。また、思考の構成物と射影された事実の構成物の関係の種類は重要ではない。それを見つけるのは心理学の仕事であろう」(NB 130、原文イタリックは傍点) というものである。このやりとりからわかるように、『論考』において、命題が事実として捉えられていることはあきらかである一方で、事実としての命題を構成するものが何であるかについては、哲学ではなく心理学の仕事に委ねられていて答えられていない。これについての答えをウィトゲンシュタインから期待することはできないという点を留保した上で、以上を通じて世界に関連して明らかになる重要な点は次の通りである。「1」により世界は事実の総体として定義されている。命題は事実の論理像であり（テーゼ1）、それは世界（諸事実）と射影関係にある命題記号であり、それ自体が一つの事実である（テーゼ2）。これにより次が導かれる。

テーゼ3:

命題は事実として世界の一部である。

このテーゼの特徴は、ムーア (George Edward Moore) とラッセルの命題についての見解と対比することでより明確になる。ムーアとラッセルの場合はいわゆる命題説として、文と命題を分ける。ある特定言語の文Sが有意味であるのは、それが抽象的な内容である命題Pを表現するからであるとする⁵⁾。その上でムーアの場合であれば、「宇宙のまったくすべての内容物は、すなわち存在するまったくすべてのものは、二つの集合に分けることができよう—つまり一方で命題に、他方で命題ではないものに」(Moore, 2013: 56) とする。ウィトゲンシュタインはこのように考えていない。彼は命題そのものを事実と捉え、〈命題と事実の関係〉を世界の中の〈事実と事実の関係〉として捉えている。世界はあくまで「事実の総体」(TLP, 1.1) であり、命題も世界の中に事実として存するということになる。

3 第二の主張: 「価値」のない「世界」

次に「6.4」から「6.522」では、「世界」、「事実」、「命題」、「真理関数」等に関する一連の主張を離れ、「価値」(TLP, 6.41)、「倫理学」(TLP, 6.42)、「良き意志」「悪しき意志」(TLP, 6.43)、「神秘」(TLP, 6.44)、「謎」(TLP, 6.5)、「生の問題」(TLP, 6.52) に関する主張が行われる。ここではこれらについて、端的に結論が述べられているが、それぞれの項目について十分な、あるいは具体的な説明がなされていない。これだけではウィトゲンシュタインが倫理学や価値という言葉で何を具体的に考えていたのか十全にはあきらかにならない。このことを補うためには、後年彼がケンブリッジ大学のThe Heretics Societyで行なった講演(『倫理学講和 (A Lecture on Ethics)』)が参考になる。この講演は『論考』を完成させてから11年後(1929年11月)に行われ、彼がケンブリッジ大学に戻り、哲学の活動を本格的に再開させた時期にあたる。まだ彼が中後期の思想を本格的に発展させていないころであり、主張の骨子は『論考』の基本的な考えをそのまま反映している。また題名が示す通り、この講演では論理ではなく倫理に主眼を置いていて、倫理学について『論考』よりももう少し詳しく、具体的な説明が行われている。

その概要は次の通りである。まずウィトゲンシュタインはムーア (G. E. Moore) の『倫理学原理』の「倫理学とは良いことへの普遍的な探求である」を引用する (LE, 4)。その上で、倫理学の意味を明確にするために、それをいくつかの同義的な表現で言い換える。言い換えは、あたかも同じ感光紙に異なる顔の写真を重ね合わせることにより、その人たちに共通の特徴をあきらかにするかのごとく、それらの表現に共通の特徴を示すためである。言い換えられた表現は次の通りである。「倫理学とは価値あること、または本当に重要なことへの探求である」、「倫理学とは人生の意味、または人生を生きるに値するものとする、または正しい生き方への探求である」(LE, 5)。これにより彼は、倫理学を価値あること、本当に重要なこと、人生の意味等、彼が同義的表現で言い換えたものに対する探究である、ととらえていたことがわかる。記述の

簡略化のために、以下これらの言い換えを価値という一つの言葉で表すことにする。そうするとこれは次のテーゼに要約することができる。

テーゼA

倫理学とは価値の探求である。

その上で彼は、次のような主張を行う。これらの倫理学についての表現は、「瑣末なあるいは相対的な意味」を持つ場合と、「倫理的または絶対的な意味」を持つ場合に分かれる（引用はいずれもLE, 5）。前者は相対的な価値の探求に該当する。それは良い椅子、良いピアニスト、良い走者、目的地に行くための正しい道のように、ある特定の目標に照らし合わせて、それに役立つか否かの観点で良いか悪いか、正しいか否か等を表現する場合に該当する。これらの場合は、すべて単なる事実の言明として言い換えることが可能である。例えば「この男は良い走者だ」は、「彼はあるマイル数がある^{ぶんすう}分数で走る」と言い換えることができる。それに対して後者は、絶対的な価値の探求に該当する。絶対的な価値は、私たちが「世界の存在に驚きの念を持つ」、あるいは「絶対に安全であると感じる」、あるいは「根源的な罪悪感を感じる」といった経験をする時にあらわれる（引用はいずれもLE, 5）。これらの経験は、「倫理的・宗教的表現」として、それぞれ「神がこの世を創造した」、「われわれは神の手の中にあるとき安全だと感じる」、「神はわれわれの行為を認めない」と言い換えることができる（引用はいずれもLE, 10）。しかしこのような経験を通じて把握する価値は、相対的価値の場合とは異なり、事実の言明として表現することはできない。例えば「世界の存在に驚きの念を持つ」という経験は、私たちが日常生活の中で今まで出会ったことがない出来事に遭遇して驚くという経験とは異なる。後者の驚きはその原因を究明すれば、科学的体系の中でその理由を説明することができるのに対して、前者の驚きはそのような説明を与えることはできない。それは本来言語内の命題で表現することができないものであり、それについて語ることは無意味である。以上のウイトゲンシュタインの見解を踏まえると、絶対的な価値を探求する倫理学は次のテーゼとしてまとめることができる。

テーゼB

絶対的価値を探求する倫理学においては、その探求の対象を事実として言明することはできない。

その上で、彼は講演を次の言葉で締め括る。「しかし、それ[絶対的価値についての言明]は、私が個人的に深く敬意を払わざるをえず、私の生涯を通じてあざけることはないような、人間の心の中にある傾向を記した文章である」(LE, 12)。絶対的価値を探求する倫理学では、その探求について語る事が無意味だとしても、ウイトゲンシュタイン自身はそのような言明に深い

敬意を払い続けるというわけである。

以上の『倫理学講話』の内容を参考に、『論考』の「6.4」から「6.522」を確認する。そこでの彼の倫理学と価値についての主張の要点は次の通りである。

世界の中には価値は存在しない。— かりにあったとしても、それはいささかも価値の名に値するものではない。……それは世界の外になければならない (以上、TLP, 6.41)。それゆえ倫理学の命題も存在しえない (TLP, 6.42)。倫理が言い表しえぬものであることはあきらかである (TLP, 6.421)。

この箇所が意味することは次の通りであろう。「価値」は「事実の総体」(TLP, 1.1) である「世界」(TLP, 1) の中には存在しない。それは世界の外にしかない。「倫理学」は「価値」を取り扱い、それについて語るものであるが、対象となる価値は世界の外にある以上、それは「世界」と射影関係にある「命題」(TLP, 3.12参照) によって表現することはできない。この主張は『論考』に言う「価値」は、『倫理学講話』に言う「絶対的価値」と同義であるととらえれば、テーゼBと整合する。『倫理学講話』と『論考』での価値の主張に関する違いは、上述の引用の通り、後者ではそれが「1」に言う「世界」と明確に関連付けられているという点である。この『論考』の論点を反映すると、次のテーゼCを導くことができる。

テーゼC

価値を探求する倫理学の対象は、世界の中に存在しない。

このテーゼCにおいて、ウィトゲンシュタインの考える倫理学・価値と世界の関係は明確である。この主張においては、「世界」の中には「価値」は一切ないということになる。

4 第3の主張：「ナンセンス」

4.1 形而上学的解釈

前節と前々節で、『論考』の第一の主張（「1」～「6.3751」）と第二の主張（「6.4」～「6.522」）における世界観（世界と命題の関係、世界と価値の関係）を確認した。その上で「6.53」以降の第三の主張は、最終的にこれら二つの主張を踏まえ、それらを統合し、「語りえぬものについては、沈黙せねばならない」(TLP, 7) に至る。それは「6.53」と「6.54」の二段階で行われている。

第一段階（「6.53」）では、「語りうること」は「自然科学の命題」すなわち「哲学とは関係のないこと」であり、それ以外は「語らぬこと」が正しいとする（引用はいずれも TLP, 6.53）。この主張は旧来の哲学を否定するものであり、「本来の正しい哲学の方法」は、「誰か形而上学なことを語ろうとするひとがいれば、そのたびに、あなたはその命題のこれこれの記号にかなる意味を与えていないと指摘する」ことであるとする（引用はいずれも TLP, 6.53）。この主張

は、『論考』の第一の主張（「1」～「6.3751」）、第二の主張（「6.4」～「6.522」）それぞれとの関係で解決すべき困難な問題を生む。まず第一の主張との関係では、次の通りである。「6.53」に言う「自然科学の命題」とは、第一の主張に言う「真な命題の総体」のことである（「真な命題の総体が自然科学の全体（あるいは諸科学の全体）である」（TLP, 4.11））。第一の主張において、ウィトゲンシュタインはこうした「命題の本質を説明」（NB, 39）しているわけであるが、もし自然科学の命題以外を語らぬこととするのであれば、第一の主張自体も語ることはできないということになる。第二の主張との関係では、それは困難な問題を生み出すと言うよりは、真っ向から衝突していると言う方が適切であろう。そこに展開されている倫理、価値等に関する主張は、自然科学の命題ではなく、まさに哲学と密接に関係するものであり、「6.53」の主張に基づけば、これこそ語るべきではないということになる。例えばウィトゲンシュタインは第二の主張の中で「倫理と美はひとつである」（TLP, 6.42）と述べる。この言明はあきらかに自然科学の命題ではなく、典型的な哲学の命題であると言える。これら二つの問題（あるいは衝突）は、言うまでもなく多くの論者が取り上げてきた点である。たとえばギーチ（P. T. Geach）は、チェスで自分の打ち手で自分のチェックメートを確定させることになぞらえ、これを“Ludwig’s self-mate”（Geach, 1976: 54）と呼ぶ。

このself-mateの状況を救い、『論考』から有意義な内容を取り出す標準的な試みは、いわゆる形而上学論的解釈と言われるものであり、その代表的な論者はハッカーである。ハッカーの解釈は次のようなものである（本文節の以下のハッカーの解釈の要約は、Hacker, 1989: 18-19より本稿筆者作成）。ハッカーはまず「無意味（senseless, sinnlos）」と「ナンセンス（nonsense, unsinnig）」を区別する。まず無意味に該当するのは、トートロジー及び矛盾の命題（「論理的命題」）である。これらの命題は世界の状態（事実）とは無関係に、トートロジーの場合は真、矛盾の場合は偽となる。それらは世界の状態について「何も語っていない」（TLP, 4.461）ため無意味である。しかしそれらは常に真（または偽）であることによって、私たちに世界の論理構造を示すため、ナンセンスではない。ナンセンスに該当するのは、一見命題の形をしているが、論理的構文の規則（ある語が他の語といかなる組み合わせによってのみ意味を持つかを示す規則）に従っていない言明（「擬似命題（pseudo-proposition）」）である。それらは無意味な命題と同じように世界の状態について何も語らないだけでなく、無意味な命題とは違って世界の論理構造を示すこともない。この無意味とナンセンスは、『論考』本文中でも明確に区別されている。ハッカーは、このナンセンスを「明白なナンセンス（Overt Nonsense）」と「隠されたナンセンス（Covert nonsense）」に区別する。明白にナンセンスな言明は、あきらかに論理的構文の規則に反し、一目でナンセンスであることがわかる。それは例えば「善と美はおおむね同一であるのか？」（TLP, 4.003）のような言明である。一方隠されたナンセンスは、十分な訓練を受けていない読者にはわかりづらい形（隠された形）で論理的構文の規則を破る。このタイプのナンセンスが哲学の多くの領域において現れる。この場合「哲学者は、示すことしかできないことを語ろうとするが、彼らが語ることはナンセンスなので、彼らが語ろうとすることすら示さない」

(Hacker, 1989: 19) ということになる。ハッカーはこのような隠されたナンセンスをさらに「解明的ナンセンス (Illuminating Nonsense)」と「誤解を招くナンセンス (Misleading nonsense)」に区別する。解明的ナンセンスとは、単なるナンセンスではない。それは一方で命題が示すことを理解するよう注意深い読者を誘導し、他方でそれを理解する人たちにその命題自体は「規則違反 (illegitimate)」であることをそれとなく知らせる。解明的ナンセンスを通じて、哲学は次の二つの役割を果たす。

[ひとつは] 示すこと自体を見るように読者を仕向けること、[もうひとつは] 『明白でないナンセンスから明白なナンセンスに移行すること』⁶⁾ を読者に教えることによって、その人がそれについて語るという不毛な努力を防ぐこと、である。(Hacker, 1989: 19)

こうした役割を果たすことがない隠されたナンセンスは、誤解を招くナンセンスだということになる。

このハッカーの解釈は先に述べた二つの問題 (あるいは衝突) をうまく解決するだろうか。そのことを『論考』の第一の主張 (「1」～「6.3751」) と第二の主張 (「6.4」～「6.522」) のそれぞれについて確認する。まず第一の主張との関係では、それは問題 (一つ目の問題) をうまく解決するように見える。第一の主張は、先述の通り「命題の本質を説明」している。その説明を注意深く読めば、その説明自体はその説明が説明の対象としている「命題」には該当しないこと、またその説明自体は本来「命題」で語るができないものであること、に読者は気づくことができる。つまり読者は、『論考』の第一の主張は「命題」を使って読者に語っているのではなく、「命題」以外のもの (擬似命題) を使って「命題」が何であるかを示しているということを把握することができる。これによりこの主張は、「示すこと自体を見るように読者を仕向」(Hacker, 1989: 19) けるという哲学としての一つ目の役割をはたす。またその上で第三の主張にて「自然科学の命題以外は……語らぬこと」(TLP, 6.53) と明確に述べることによって、「『明白でないナンセンスから明白なナンセンスに移行すること』を読者に伝え、その人がそれについて語るという不毛な努力を防ぐ」(Hacker, 1989: 19) という哲学としての二つ目の役割をはたす。ここまでのところはこれで良く、この解釈の説得力は高い。しかしこの第一の主張の理解を前提に、第二の主張に進むとうまくいかず、二つ目の問題は依然として解決しない。ハッカーの解釈に従うと、読者は第一の主張を通じて「命題」の本質を理解する。その主張によると要素命題 (「命題」の最小単位) は事態と射影関係にあり、事態は「諸対象 (もの) の結合」(TLP, 2.01) であり、対象は「空間、時間、そして色」(TLP, 2.0251) という形式を持つ。一方第二の主張の主題である「価値」や「倫理」は、このような形式を持つ対象には該当しない。ハッカーの解釈に基づき第一の主張の内容 (命題の本質) を理解することにより、第一の主張の内容と第二の主張の衝突は鮮明になる。この解釈が正しければ、第二の主張は単なる誤解を招くナンセンスに該当すると言わざるをえないであろう。

4.2 断固たる読み

この状況は解消できるのか。このことを見るために、「6.53」の次の「6.54」を確認する。それは次の通りである。

私を理解する人は、私の命題を通り抜け –その上に立ち– それを乗り越え、最後にそれがナンセンスであることに気づく。そのように私の諸命題は解明を行う。(いわば梯子をのぼりきった者は梯子を投げ捨てねばならない。)

私の諸命題を葬りさること。そのとき世界を正しく見るだろう。(TLP, 6.54)

この前の段落の「6.53」では、「自然科学の命題」のみを語るべきであるとして、少なくとも命題の本質を語る第一の主張の内容は擁護されている、つまり第一の主張はハッカーの言う意味で解明的ナンセンスとして取り扱われているように見えた。しかし「6.54」で「私の命題」、すなわち『論考』の命題は「ナンセンス」であるとウィトゲンシュタインが言うとき、このナンセンスは解明的ナンセンスよりさらに踏み込んで強い意味で言っているように見える。『論考』における「私の命題」がナンセンスであり、葬り去るべきものであるならば、そもそもウィトゲンシュタインがここで言っていることは、私の諸命題はそもそも隠されたナンセンスでなく、単なるナンセンスであり、それを通じて読者に伝えるべき内容などないのだ、ということなのかもしれない。この路線の解釈はいわゆる「断固たる読み」と呼ばれる解釈であり、その主たる提唱者であるコナントとダイヤモンドである。この解釈の骨格は次のようなものである(以下の解釈の要約は Conant, 2001: 189-198 より本稿筆者作成)。

コナントは、『論考』におけるナンセンスの解釈は二つの仕方で把握することができる。一つはハッカーらが主張する「実態のある概念把握 (the substantial conception)」であり、もう一つはコナントらが主張する「厳格な概念把握 (the austere conception)」である。前者の概念把握に基づけば、ナンセンスは「実態のあるナンセンス (substantial nonsense)」(ハッカーの言う「隠されたナンセンス」に該当)と「単なるナンセンス (mere nonsense)」(ハッカーの言う「明白なナンセンス」に該当)の二種類に分かれ、後者の概念把握に基づけばナンセンスには「単なるナンセンス」だけしかない。

コナントによると、『論考』のナンセンスの概念把握の要諦は「3.32」の「記号 (Zeichen)」と「記号」の「知覚可能な側面」である「シンボル (Symbol)」の区別にある。記号とは正字法の単位で、命題のための認知可能な諸表現が共通して持つもの(記号のデザイン、表記されたもの、象徴等)であり、シンボルとは論理的な単位で、有意味な命題が共通して持つもの(固有名、一次関数等、特定の論理的範疇に属する項目)である。両者の区別の重要さは、日常言語において「同じ語が異なった仕方で表現する –つまり同じ語が異なったシンボルに属する」(TLP, 3.323)場合に顕著となる。ここで同じ語(記号)が異なったシンボルに属するとは、たとえばドイツ語の“ist”という語が、ある場合には繫辞として、ある場合には等号として、ある場合は存在の表

現として扱われること、あるいは「緑は緑である」という命題において、はじめの「緑」は人名として、あとの「緑」は形容詞として扱われることを指す（これらの例はTLP, 3.323より）。『論考』によると、こうした「もっとも基本的な混同は容易に生じ」、「哲学の全体がこうした混同に満ちている」(TLP, 3.323)。この混同を避けるためには、日常言語の表記法において与えられた記号（例えば“ist”、「緑」）が、与えられた場面においていかなるシンボルとして使用されているのかを見分けることが必要となる。この点について『論考』は、次のように述べる。「記号においてシンボルを見分ける [erkennen] ためには、私たちは有意味な使用の文脈 [sinnvollen Gebrauch] を考察しなければならない」(TLP, 3.326、この箇所はコナントの『論考』英訳をそのまま和訳している⁷⁾)。「3.326」では、シンボルを見分けることと有意味な使用の文脈を考察することが表裏一体となっている。つまりコナントによると、これは一方で「記号が現れる一続きのもの [命題] が有意味であるということが、記号においてシンボルを見分けることができることの条件」(Conant, 2001: 194) となっていることを、他方で「ある命題がナンセンスであると見分けることは、記号においてシンボルを見分けることができないということ」(Conant, 2001:194) を意味する。これを前提にすると、『論考』において「ある命題がナンセンスであると見分ける」ということは、「それが何かを言うことにまったく失敗していることを見分けること」であり、「それが言うことができない何かを言おうとしていることを見分けること」ではない(引用はいずれも Conant, 2001: 194)。このことは、「3.326」と同じ「見分ける (erkennen)」という語を使って、ウィトゲンシュタインが「6.54」で「誰であれ私を理解する者は最後にはそれら [私の諸命題] がナンセンスであることを見分ける (erkennen)」と主張する場合も同様である。この主張は、『論考』の諸命題（「私の諸命題」(TLP, 6.54)）においては、シンボルを見分けることはできず、したがってそれらは何かを言うことにまったく失敗しているということの意味する。つまりそれらは「単なるナンセンス」であるということになる。

こうした理解を前提に、コナントとダイヤモンドは、「断固たる読み」は次のようなテーゼとして要約できると言う。

第一にウィトゲンシュタインが § 6.54 で、「ナンセンス (nonsensical)」だと認識すべきであると言った『論考』のそれらの命題を、言い表すことができない洞察を伝達するものとして捉えないということ。第二の特徴は、そのような認識が『論考』の読者の側に求めることは、その作品の本体⁸⁾において提示された意味の理論 — ある文が意味を成す条件と、成さない条件を特定する理論 — を適用することを求めるという考え方を拒否することである。(Conant and Diamond, 2004: 47)

彼らによると彼らの解釈は『論考』全体を「読むためのプログラム」(Conant and Diamond, 2004: 47) であり、「『論考』をこのように読んではいけない」という否定的な形で示されている。その内容は上記引用からあきらかなように、『論考』は「言い表すことができない洞察を伝達す

るナンセンス」(ハッカーの言う「解明的ナンセンス」)として認識されるべきではないし、その認識を通じて読者が「意味の理論」を適用するようになることを求めているものではない、ということになる。したがってこの解釈は、ハッカーの解釈と大きく異なる。

5 「世界を正しく見る」ということ

ハッカーを中心とする解釈と、コナントとダイヤモンドを中心とする解釈は20年以上に渡る「激しい論争のテーマ」(Bronzo, 2012: 45)となり、まだ決着がついていないとされる。本稿ではこれらのどちらが正しい立場かということを論ずることは目的とはしない。そうではなく、本稿でのここまでの論述を踏まえ、より限定した論点について一つだけ主張を行い、それが彼(女)らの解釈とどのような関係になるのかを確認する。限定された論点とは、この「6.54」の最後にワイトゲンシュタインが「世界を正しく見る」と言った時、彼が思い描き、読者が見ることになる「世界」とはどのようなものかという点である。『論考』の論述の順序にもとづけば、これらの二つの解釈のどちらが正しいとしても、第三の主張、つまり『論考』の最後(ただし「7」を除く)に置かれたこの一文は、そこまでの主張をすべて理解した読者に対し、ワイトゲンシュタインが結論として読者に伝えようとした一つの内容 - 正しく見られた世界- があることを示している。

『論考』における「世界」の概念は、もちろん重要な役割を果たしている。『論考』は世界で始まり(「世界は成立していることがらの総体である。」(TLP, 1))、世界で終わる(「世界を正しく見る」(TLP, 6.65))と言っても過言ではない。この「世界」の概念がどう捉えられているかを本稿第2節(第一の主張)と第3節(第二の主張)それぞれで提示したテーゼ3とテーゼCで確認する。テーゼ3は次の通りであった。

テーゼ3:

命題は事実として世界の一部である。

このテーゼでは、命題は命題記号として一つの事実であり、世界の一部を構成するものとして捉えられているということであった。一方でテーゼCは次の通りであった。

テーゼC

価値を探求する倫理学の対象は、世界の中に存在しない。

このテーゼでは、価値として対象となるものは世界の中には存在しないということであった。テーゼ3とテーゼCから導かれる一つの結論は、命題は事実として世界の一部である(テーゼ3)から、価値には該当しない(テーゼC)ということである。ワイトゲンシュタインは、「6.53」で「自然科学の命題以外は - それゆえ哲学とは関係のないこと以外は - 何も語らぬこと」と

述べている。一般にこれは〈自然科学の命題以外のすべての命題は語るべきものではない〉という主張として理解されている。私もその理解に合意する。それに加えて命題が価値には該当しないという上記の理解を重ね合わせると、「6.53」のこの箇所は、語るべき自然科学の諸命題には価値がない、ということ述べているという結論にいたる。留意すべきは、これは自然科学の諸命題がナンセンスであるという理解ではないし、それらを語るべきではないとする理解でもない。そうではなく、これは諸事実(世界)との射影関係を前提として、自然科学の命題は有意味な命題として成立するが、それはウイトゲンシュタインが第二の主張で述べた価値には該当しない、という理解である。このように理解すると、結局ウイトゲンシュタインが持つ世界観は次のようなものである。世界を構成する諸事実は、自然科学の命題(有意味な命題)で語りうる対象であるが、価値はない。またそれ自体が事実である自然科学の命題にも価値はなく、それらを語ることにより価値が生ずることはない。価値の対象はすべて世界の外にある。

この理解がハッカー、及びコナントとダイヤモンドの解釈とどのような関係にあるかを見る。まず後者(コナントとダイヤモンド)の解釈は先ほど見たように、『論考』は「言い表すことができない洞察を伝達するナンセンス」ではないし、そこに述べられているように見える「意味の理論」も適用すべきではないという意見であった。一方『論考』から上記の世界観を読み取るということは、『論考』の記述から「言い表すことができない洞察」を取り出しているということ、またそれを取り出すにあたって「意味の理論」を利用しているという点で、この「プログラム」の線上にはない。では後者(ハッカー)の解釈との関係はどうであろうか。まず同じ点は、ハッカーの解釈も本稿の解釈も『論考』から「意味の理論」を利用してウイトゲンシュタインの「洞察」を取り出そうとしている点である。ハッカーはコナントとダイヤモンドの解釈に対して数多くの反論を述べているが、その一つに「はしごを捨てることと、生湯とともに赤子を捨ててしまうことは別」(Hacker, 2001: 369) だというものがある。この印象深い反論は、具体的にはウイトゲンシュタインによるフレーゲ・ラッセルの論理学への批判について行われている。ウイトゲンシュタインはこの批判を『論考』の第一の主張の中で行っただけではなく、その後も生涯に渡って繰り返し主張している。もし第一の主張自体も捨てられるべきものであるとするならば、それをこうして繰り返し主張するわけではない、というのがハッカーの言い分である。この生湯の例を使うと、本稿がここでやっていることは、『論考』の中にウイトゲンシュタインの世界観を洞察として読み取り、それを赤子としてベビーバスに残そうという試みである。その意味では、この解釈はハッカーの解釈と同じ線上にあると言える。他方ハッカーの解釈と異なる点は以下の通りである。ハッカーの解釈の主眼は、解明的ナンセンスという概念を用いて、『論考』は本来ナンセンスである言明(擬似命題)を使って「命題」が何であるかを示しているとするものであった。これはすでに述べた通り『論考』の第一の主張について整合的な解釈を示している。本稿はこれについて反論するものではない。しかしこれが『論考』の第二の主張についてどれほど有効であるかは疑問である。すでに指摘したように、ハッカーの解釈に従い第二の主張を読むと、その主張は誤解を招くナンセンスに該当するよう見える。これに対して

本稿の解釈はウィトゲンシュタインの第二の主張についても、ウィトゲンシュタインが読者に対して伝える実質的な内容のある主張であると解する。この点でこの解釈はハッカーの解釈と異なっている。それにより取り出したウィトゲンシュタインの世界観は前文節の最後に既述の通りである。

6 おわりに

『論考』は言語を主題とする哲学書として、まず彼の言語の取り扱い(言語論)に焦点をあてて論じられることが多い。通常この観点で論ずる場合、いかなる命題が有意味で、いかなる命題が無意味(ナンセンス)なのか、という意味の理論が主要な論点の一つとなる。本稿はこれが重要な論点であるということを否定するものではない。

一方本稿の顕著な特徴は、『論考』の最後から二文目の「世界を正しくみる」に焦点をあて、ウィトゲンシュタインの世界観を取り出すことを目的とする点である。それは世界の価値についての彼の考えを取り出すという作業でもある。その作業を通じて、命題は意味の観点だけではなく、それ自体が一つの事実として価値の観点で考察される。その考察から導かれるものは、『論考』においては、言語哲学的な命題の意味の枠組み(第一の主張)に、世界観にもとづく価値の枠組み(第二の主張)が言わば覆い被さっていて、このことを理解すると命題(有意味な命題・自然科学の命題)には(第二の主張に言う意味での)価値はない、という彼の洞察が浮かび上がる。

ウィトゲンシュタインの言語哲学の変遷は彼の世界観と一体不可分となっているように見える。興味深いことに、後期に入り彼の思想が変化するにつれ、『論考』で想定していた世界観も変容する。この観点で彼の主張を分析することにより、彼の思想を理解する新しい視点を得ることができる、というのが本稿の立場である。

注

- 1) 『論考』から引用の場合はTLPと略記する。引用箇所はページ数ではなく、ウィトゲンシュタインが付与した番号を表記する。本文中でこれらの番号に触れる時は鉤括弧に番号を入れて表記する(例:「6.54」)。『論考』の訳文は野矢訳, 2003を使用し、そうでない場合はその旨を明記する。なおここで言う「最後」は、「6.54」の後に「7」の一文があるので、正確にはその一つ手前を意味する。
- 2) たとえば『論考』に関する論争をまとめた吉田, 2016: 20-21。
- 3) 本稿では『論考』本文に付与された番号のうち、重要度が高く小数点がついていない「1」「2」……「7」の言明を主文と呼ぶ。
- 4) 本稿で角括弧は筆者による補足を表す。
- 5) これは先ほど引用した『哲学探究』§91で批判された二つの考え方の前者、すなわち「命題記号と事実の間に、純粋な中間的存在を想定する傾向」に該当している。従って『探究』のこの箇所でもウィトゲンシュタインは、ムーア・ラッセルと『論考』両方の命題の考え方を批判していると解するのが適切であろう。

- 6) 『哲学探究』 § 464からの引用。ハッカーの英訳からではなく、『哲学探究』の原文から直接邦訳している。
- 7) コナントは“sinnvollen Gebrauch”を“the context of significant use”と英訳しているの、それに従い「有意義な使用」ではなく、「有意義な使用の文脈」と和訳している。
- 8) コナントとダイヤモンドの考えでは、『論考』の「序と最後の諸文 (closing sentences)」は「その本の目的とそれが求める読み方の種類」についての意見を述べる「枠組み (flame)」と呼び (Diamond, 2001: 149)、それ以外の箇所のほとんどを「本体 (body)」と呼ぶ。

参考文献

ウイトゲンシュタインの著作の略号

LE : A Lecture on Ethics.

NB : Notebooks 1914-1916.

PI : Philosophical Investigation (Philosophische Untersuchungen).

TLP : Tractatus Logico-Philosophicus.

Ayer, A. J. (1985) *Wittgenstein*. University of Chicago Press.

Bronzo, Silver. (2012) “The Resolute Reading and Its Critics: An Introduction to the Literature” *Wittgenstein-Studien*, vol 3, edited by Juliet Floyd et al, De Gruyter, pp. 45-80.

Conant, James. (2001) “Elucidation and nonsense in Frege and early Wittgenstein” *The New Wittgenstein*, edited by Alice Cray and Rupert Read, Routledge, pp. 174-217.

Conant, James, and Cora Diamond. (2004) “On Reading the Tractatus Resolutely: Reply to Meredith Williams and Peter Sullivan” *Wittgenstein’s Lasting Significance*, edited by Max Kölbel & Bernhard Weiss, Routledge, pp. 42-97.

Diamond, Cora. (2001) “Ethics, Imagination and the Method of Wittgenstein’s *Tractatus*” *The New Wittgenstein*, edited by Alice Cray and Rupert Read, Routledge, pp. 149-173.

Geach, P.T. (1976) “Saying and Showing in Frege and Wittgenstein” *Essays on Wittgenstein in Honour of G. H. von Wright*, edited by J. Hintikka, Acta Philosophia Fennica, pp. 54-70.

Hacker, P.M.S. (1989) *Insight and Illusion*. Oxford University Press.

Hacker, P.M.S. (2001) “Was He Trying to Whistle It?” *The New Wittgenstein*, edited by Alice Cray and Rupert Read, Routledge, pp. 353-388.

Kripke, Saul A. (1982) *Wittgenstein: On Rules and Private Language*. Harvard University Press.

Maddy, Penelope. (2014) *The Logical Must*. Oxford University Press.

Moore, George Edward. (2013) *Some Main Problems of Philosophy*. Routledge.

Wittgenstein, Ludwig. (1965) “A Lecture on Ethics” *The Philosophical Review*, vol. 74, No. 1, pp. 3-12. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/pdf/2183526

Wittgenstein, Ludwig. (1979) *Notebooks 1914-1916 2nd Edition*. Ed. G. H. von Wright and G. E. M. Anscombe, Trans. G. E. M. Anscombe, Basil Blackwell.

Wittgenstein, Ludwig. (2009) *Philosophische Untersuchungen*. With trans. G.E.M Anscomb, P.M.S. Hacker and Joachim Schulte, Blackwell Publishing Ltd.

Wittgenstein, Ludwig. (1961) *Tractatus Logico-Philosophicus*. With trans. D. E. Pears & B. F. McGuinness, Routledge & Kegan Paul.

ウィットゲンシュタイン (2003) 『論理哲学論考』 野矢茂樹訳、岩波書店。

吉田寛 (2016) 「『はしご』としての「論理哲学論考」の読み方と哲学の可能性」『これからのウィットゲンシュタイン：刷新と応用のための14編』 荒畑靖宏・山田圭一・古田徹也編著、リベルタス出版、19-32頁。

(2021.9.22 受稿, 2021.11.11 受理)